



「『高知の授業の未来を創る』推進プロジェクト事業 令和4年度高知の授業づくり講座」では、学習指導要領が目指す授業づくりを推し進めるとともに、日常的に授業研究に取り組む風土づくりを行い、自ら学び続け、共に高め合う教員の育成を目指し、拠点校を会場に教材研究会・授業研究会を1セットとして実施します。高知市の拠点校である第四小学校の第1回【教材研究会】（5月25日実施）、第2回【授業研究会】（6月16日実施）を中心に本単元の学びの様子を紹介いたします。



領域「話すこと(発表)ーイ」 単元名 高知のおすすめの場所を紹介しよう

Unit 3「Let's go to Italy」NEW HORIZON Elementary 6 English Course(東京書籍)

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。～小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語科 目標～



言語活動とは

学習指導要領の外国語活動や外国語科においては、言語活動は、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。

*「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」(2017年 文部科学省)

言語活動の設定のポイント

- ① 伝え合う目的(必然性)がある。
② 相手意識がある。
③ 「本物」のコミュニケーションである。
④ コミュニケーションの楽しさや意義を感じることができる。

目標と指導と評価の一体化

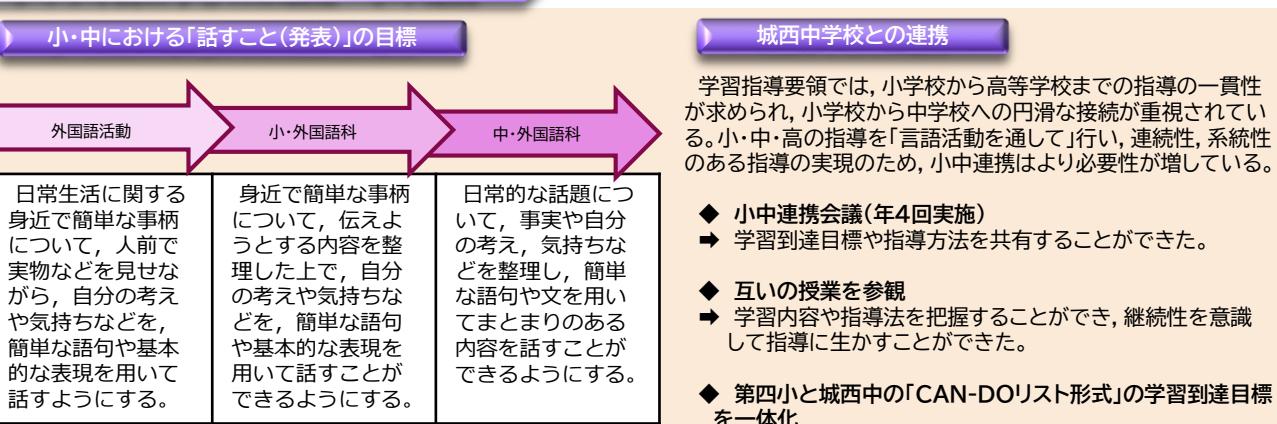
単元目標

高知に来たばかりのALTの先生に高知のことを知ってもらい、行きたいと思ってもらえるように、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを含めておすすめを紹介することができる。

Table with 7 columns (Lesson 1-7) and 2 rows (Target, Student Example). Lesson 1: Introduction of ALT's recommendation. Lesson 2: Researching info. Lesson 3: Finding reasons. Lesson 4: Researching famous spots. Lesson 5: Organizing content. Lesson 6: Reconstructing to partner. Lesson 7: Introducing recommendation. Student example shows a dialogue about Katsurahama and Sakamoto Ryoma.

POINT それぞれの授業の終わりに、どのような力を付けたいか、「目指す子供の発話例」=「b基準の評価」を具体的に書くことで、単元ゴールに向けてのシミュレーションをすることができ、軸をもって授業をつくることができる。

小中9年間の学びの系統性～小中連携～



*第四小学校では、小学校1年時から英語教育を実施しており、単元を通して付けたい資質・能力を、自校の「CAN-DOリスト形式」の学習到達目標で確認、設定をしている。(令和4年度現在)

授業研究会 2/7時間目(本時)



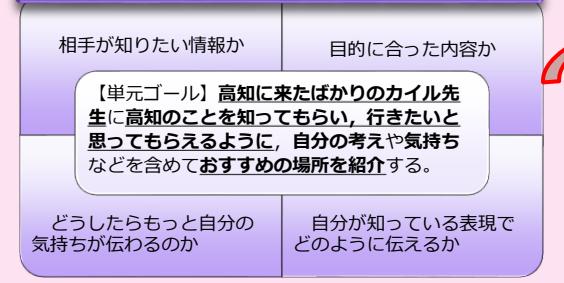
《協議の視点》 本時の中間指導は、本単元の目標の達成に向けた適切な中間指導となっているか。

- ◆中間指導の視点◆
[言語面]
・ 言いたかったけれど言えなかったことを確認。
・ 正しく表現できているか。
[内容面]
・ ALTの先生についてリサーチしたことが生かされているか。



前時(1/7)から、カイル先生のことを知るために、質問をしてリサーチを行い、マッピングをすることで、伝えようとする内容を整理していく。

外国語によるコミュニケーションによる見方・考え方



実際にカイル先生におすすめをする。 You like sushi. Let's go to (寿司店名).

～言語活動と振り返りのサイクルを繰り返す～ ただ言語活動を行うのではなく、その間に中間指導を入れることで、子供は見方・考え方を働かせながら、資質・能力を身に付けていく。

参加者の声

- ・ 子供が言いたかったことを拾い、知っている言葉で何とか表現できないかと考えさせていた。
・ 中間指導の後に、自分の表現に使えるものはないか、個で考える時間「Thinking Time」を取り、個人で整理させていたことがよかった。
・ 子供が言いたいことをもっと掘り下げていくとよかったのではないかと。
・ 伝える相手(ALTのカイル先生)が目の前にいるので、伝わるかどうか尋ねるなど、ALTをもっと活用できたのではないかと。

ICTの活用による指導の工夫

- 〈前時の振り返りを全体に共有〉
先生は、おびや町、城西公園が好きだと言っていました。だから、僕がおすすめする場所は土曜日や日曜日をやっているところです。理由は、あそこは先生が好きなおみやげやキウイ、寿司、たこ焼きなどのおいしい食べ物があるから。しかも、高知県しかない(いち)だからです。(原文)
「行ってみたいと思ってもらえるように」という目的に沿った内容になっていることを全体で確認することができる。

〈スプレッドシートに本時の振り返りを入力する〉
ICTを活用し、共有することで、他者の振り返りを見ることができ、互いに気付きを得ながら自分の学びについて考えを深めることができる。

講師講話

文部科学省初等中等教育局 視学官 直山 木綿子 先生

- 1. 中間指導 ⇒ 子供に『思考の仕方』を見せよう
中間指導は、みんなが自分の表現として使えるようになるためにするもの。例えば、「〇〇が近い」と言いたい子供に対して、「近い」という言葉だけにフォーカスをせず、子供が言いたい言葉がどういう状況で使われているかを把握することが大事。
「何をどう言いたかったの?」「どこから近いの?」のように、かみ砕いて聞いていくことで、子供に『思考の仕方』を見せしていくこと、その繰り返しで子供は別の場面でも、言いたいことをかみ砕いて表現することができるようになる。
2. 「CAN-DOリスト形式」の学習到達目標の活用 ⇒ 子供がもっている知識(既習)を把握しておく
子供は言いたいことを伝えるために、もっている知識を総動員して伝えようとする。教師は、子供がどんな言葉を知っているのか、何が出来るか、どこまで積み上げているのかを「CAN-DOリスト形式」の学習到達目標で把握しておくことが大事である。
3. 一人一台端末の活用 ⇒ 情報を蓄積していこう
一人一台端末の特色に「情報の蓄積」「情報の視覚化」がある。小学校での指導は音声中心となるため、一人一台端末を活用して記録に取り、視覚化していくとよい。単元を通して子供に動画を撮りためさせること(情報の蓄積)で、自身の変容を見比べさせること(見える化)ができる。